

# 小説『流れにのまれず、流れをつくる』（フリーランスの迷いと再構築）

## 第0章 登場人物紹介

- ・ 桐山 大地(きりやま・だいち) 32歳・男性

美術系大学(油絵科)を卒業後、契約社員としてデザイン会社に就職。4年前に独立し、現在はフリーランスのイラストレーターとして活動している。仕事の大半は前職のつながりに依存していたが、コロナ禍以降、依頼が激減。実家暮らしを続けており、父(65歳・無職)と母(58歳・パート)との関係も微妙に変化している。自由に描ける今の働き方に愛着がある一方、将来への不安や「結婚を機に生活を安定させたい」という思いが複雑に交錯している。これまで本格的な就職活動の経験はなく、自分の選択に自信が持てずにいる。

- ・ 西園 智久(にしぞの・ともひさ) 62歳・男性

地域のキャリア相談室に勤務するベテランのキャリアコンサルタント。かつてはメーカーの人事部門で長年にわたり採用や教育に携わり、退職後にキャリアコンサルタントとして再出発。穏やかで受容的な姿勢が特徴で、相談者の語りを丁寧に受けとめながら、気づきを促す支援スタイルを大切にしている。

## 第1章 揺らぎの中で

目が覚めたのは、昼近くだった。遮光カーテンの向こうに、春先の柔らかな光がうっすらと差し込んでいた。枕元に置いたスマートフォンには、誰からの通知もなかった。

桐山大地は、しばらく天井を見つめていた。今日も、予定はない。

いや、正確に言えば、イラストのラフを2点仕上げて送る必要がある。ただ、すでに二度ほど締切を先延ばしにしている。相手も気を使ってか、強くは催促してこない。

「こんな感じで、いいのかな……」

つぶやきながら起き上がると、居間から母の話し声が聞こえてきた。近所の人と電話しているようだった。朝のうちにパートに出かけるはずだが、今日は午後からなのだろう。

居間に顔を出すと、母はいつものように軽く挨拶をしながらも、どこか探るような視線を投げかけてきた。

「お昼、どうするの？ なにか作ろうか？」

「あ、いや。自分で何かするよ」

「……あんたさ、この前言ってた、相談所？ 仕事の話を聞いてもらえるってところ。行ってみたの？」

返事に詰まる。

「……うん、予約は入れてある。来週。」

「そう。だったら、ちゃんと話してきなさいよ。大地も、そろそろ将来のこと、考えないとね」

その「将来」という言葉の重さに、胸がざらついた。

母は心配してくれている。ただ、その言葉に込められた不安や苛立ちを、真正面から受け止めるには、まだ気持ちの準備ができていない。

イラストの仕事は、たしかに減っている。以前は月に 10 件以上あった依頼も、今は半分以下だ。生活はぎりぎりなんとか成り立っているものの、貯金も減ってきている。

それでも、会社勤めに戻るという選択肢には抵抗があった。

朝の通勤電車、人間関係、理不尽なやり取り……。もう、あの環境には戻れない。そう思ってきた。

だが最近、ふと頭をよぎるのは、「安定」の二文字だった。

——結婚を考えている相手もいる。彼女の両親にも、まだ紹介すらできていない。

「こんな働き方で、ほんとうに生活していけるの？」

彼女にそう問われたわけではない。けれど、彼女の目の奥に、そんな不安がにじんでいるような気がしていた。

自室に戻り、Mac の画面を立ち上げた。白紙のキャンバス。アイデアが湧かない。

これまでだって、漠然とした不安は何度もあった。でも今回は違う。

「今のままでいいのか？」という問いが、「今のままではだめなのでは？」という声に変わりつつある。

一度だけ開いたキャリア相談室のウェブサイト。相談は無料で、事前予約制。

重い腰を上げて送信ボタンを押したのは、数日前の夜中だった。

ただ話をするだけかもしれない。何が変わるわけでもないかもしれない。

——それでも、行ってみようと思った。

部屋の外から、また母の声が聞こえた。「午後、スーパー寄ってくるけど、何かいる？」

桐山は「大丈夫」と答えながら、心の中でこっそりつぶやいた。

「何か、見えてくるといいな……」

## 第2章 過去と現在のあいだで

桐山大地が「描く人」として生きていこうと決めたのは、決して明確な決意からではなかった。

高校の頃、静物画を描いて美術教師に褒められた。初めて「自分にしかできないかもしれない」と思えた。

その感覚を頼りに、美術系大学の油絵科へ進学した。親は最初こそ驚いたが、「好きなことなら応援するよ」と言ってくれた。

——だけど、現実には甘くなかった。

卒業を控えた頃、周囲の誰もが悩み始めた。「就職する？」「作家になる？」

自分は どうする？ と問われても、答えは出なかった。

なんとなく、就職しなきゃいけないような気がした。でも、自分で探す力も、踏み出す勇気も足りなかった。

そんなとき、先輩が声をかけてくれた。

「知り合いの会社でデザイナー探してるんだけど、やってみる？」

流れるように、デザイン会社に契約社員として入社した。仕事内容は広告や Web バナー、パッケージデザインなど多岐にわたった。忙しかったが、学ぶことは多かった。

けれど、3 年が過ぎた頃、心のどこかがざわつき始めた。

「これって、自分がやりたかったことなのかな……」

そんな気持ちを、先輩に漏らしたところ、「思い切ってフリーでやってみたら？」と言われた。独立なんて現実的じゃないと思っていたが、会社からもフリーとして業務委託する話が出て、タイミングは揃っていた。

そして、桐山は“なんとなく”独立した。

最初の 2 年はそれなりに順調だった。前職のつながりから仕事が継続し、知人の紹介もあった。

だがコロナ禍を境に、状況は一変した。

クライアントの予算が縮小し、案件が減り、価格交渉も厳しくなった。

そして今。

「描く」こと自体は、嫌いではない。むしろ好きだ。

自分の線や色に、「いいですね」と言ってもらえることは、何よりの喜びだった。

——でも、それだけでは暮らしていけない。

自分一人なら、生活レベルを落として何とかやっていけるかもしれない。けれど、彼女との将来を考えると、そうはいかない。

彼女は数年前から事務職として働き、毎日決まった時間に出勤し、休日は安定して休める生活を送っている。

桐山の働き方は、彼女にとって未知の領域に見えるだろう。

「どうしてそんな不安定な生き方をしてるの？」と聞かれたわけではない。

けれど、どこかで、責められているような気がするの、自分の内側にある不安のせいかもしれない。

——このまま描き続けて、何かが開けるだろうか？

——それとも、就職して、別の生き方を探すべきだろうか？

心の中に曖昧な霧がかかっていた。自分で選んできたようで、選ばされたような人生。

だからこそ、次の一步は、きちんと考えて決めたい。

そう思って、西園智久というキャリアコンサルタントの名前を見つけ、予約フォームに入力した。

ただの相談になるかもしれない。答えは見つからないかもしれない。

——それでも、話してみよう。何かが、変わるかもしれない。

### 第3章 思い出と焦りの狭間

待ち合わせ時間の20分前に、相談室の最寄り駅に着いた。

快晴の空に春風が混じる午後。地図アプリに沿って歩いた先に、こじんまりとしたビルが現れた。エレベーターの扉が閉まる間際、ふと手を差し伸べてくれた女性と乗り合わせ、なんとなく会釈を交わす。些細なことに、落ち着かなさがにじむ。

相談室の入り口は明るく、受付には柔らかい表情の職員がいた。「桐山大地さんですね。お待ちしております」と微笑まれ、少しだけ気が抜けた。

通された個室は、静かで空気がやわらかい。白木の机と二脚の椅子。そのうちのひとつに、初老の男性が座っていた。

「こんにちは。キャリアコンサルタントの西園智久と申します」

穏やかな声だった。ややゆっくりとしたテンポで、言葉を選ぶように話すその姿は、どこか

安心感を伴っていた。

「どうぞ、リラックスしてお話くださいね。今日はどんなことをお話ししましょうか？」

西園の問いかけに、桐山は軽くなずいた。

言葉が出てくるまでに、少し時間がかかった。

「……なんというか、このままでいいのか、わからなくなってきた。ずっと、絵を描くことを中心にして生きてきたんですけど……最近、それが本当に自分に合っているのか、不安で」

西園は黙って頷いた。ペンも手にしていたが、すぐには書かない。

「大学では油絵をやってました。でも、食べていけるとは思えなかったんで、先輩の紹介でデザイン会社に入りました。3年ちょっといて、その後フリーになって……もう4年経ちました。最初のうちは仕事もあって、それなりに生活できてたんです。でもコロナの影響もあって、徐々に減って行って……」

「最近、仕事が減ってきてしまったんですね」

「はい。前みたいにはいかないし。しかも、実は結婚も考えてて……でも、このままフリーで続けていいのか、不安なんです」

西園は、静かに目を見つめながら頷いた。

「結婚を機に、今後は安定した仕事につきたいと思っているのですね」

その言葉に、桐山は思わず息をついた。口にしていなかった本音が、そこにある気がした。自分ひとりなら、多少不安定でも何とかやっていける。でも、家庭を持つとなれば話は別だ。相手の両親や、自分の親も含め、周囲の期待や心配が押し寄せてくる。

「自分で言うのもなんですけど……就職活動って、ちゃんとやったことがなくて。今さら会社に入れるのかとか、どう動けばいいのかも、正直よくわからなくて」

「これまで、自分で選んできたというより、流れに乗ってきた感覚があるんですね」

「……そうですね。そうかもしれないです」

西園の言葉が、記憶のどこかをつついた。大学の就職活動。あの頃も「とりあえず就職しな

いと」くらいのぼんやりした動機だった。周囲と比べて、焦りだけが先に立っていた。

——そして、今もまた、同じような焦りの中にいるのではないか。

だが、あの頃と違うのは、「選び直したい」という意志が、自分の内側から湧いてきていることだった。

西園はノートに静かにメモを取りながら言った。

「今までの歩みや価値観、大事にしてきたことを少しずつ整理しながら、一緒にこれからの道を考えていけたらと思っています。今日はその入り口として、気になっていることや迷っていることを、自由に話してくださいね」

ふっと、肩の力が抜けた気がした。

ここなら、言葉にしてもいいのかもしれない。

## 第4章 語りのなかの気づき

静かな相談室に、西園の穏やかな声が響いた。

「桐山さんが今、一番引っかかっていることって、どんなことですか？」

「やっぱり……このままフリーランスを続けていいのか、迷ってるってことですかね。仕事も減ってきてるし、結婚も考えてるし……。」

「結婚をきっかけに、働き方を見直す必要があると感じているんですね。」

「はい。でも、就職したいのかと聞かれると……正直、よくわかりません。人間関係が煩わしくて、会社勤めは苦手だったんですよ。」

「人間関係から解放されたことで、フリーでの働き方が合っていると感じてこられたんですね。」

「そうなんです。自由に描けるし、自分のペースで仕事できるのは大きいです。でも、最近はその“自由”が、“不安”と紙一重に感じられてきて……。」

「将来への不安と向き合う中で、安定を求める気持ちが強くなってきたんですね。」

「はい。彼女にも、ちゃんと生活できるのかって聞かれたわけじゃないけど、そう思われてる

気がして……。それに、両親も“そろそろ会社に勤めた方が安心だ”って。」

「周囲の期待や声が、桐山さんにとってプレッシャーになっているのかもしれませんがね。」

「……そうですね。ありがたいんですけど、なんか、肩身が狭いです。実家暮らしだし、家で仕事していると“何してるの？”って空気になる。」

「そうした日常の中で、桐山さんご自身も“このままでいいのか”という問いに揺れているのかもしれませんがね。」

「……実は、自分の人生、ちゃんと“自分で選んだ”って言える瞬間が、少ない気がしてて。」

「流れに任せてきた感覚があるんですね。」

「はい。大学も、“絵が好き”だけで選んだし、就職も先輩の紹介。独立も、自然な流れで……。今、初めて“自分で選ばなきゃ”って思ってます。」

桐山の声に、ほんのわずかに張りが宿っていた。自分の内側にあるものを、ようやく言葉にできたような、そんな響きだった。

「“自分で選ぶ”という感覚、大切にしていきたいですね。今の迷いや揺れは、その選択の準備期間とも言えるかもしれません。」

「準備、ですか……」

「ええ。これまでの歩みを丁寧に振り返ることで、何が大事で、何が譲れないのか、見えてくることがあると思います。」

「……たしかに、今までちゃんと振り返ってこなかったかもしれません。」

「次回以降、桐山さんがやってきたこと、感じてきたこと、描くことの意味なども含めて、一緒に棚卸ししていきませんか？」

「はい……お願いします。」

面談が終わる頃、桐山は初めて、自分の足で歩き出す感覚を思い出していた。誰かに紹介されるのではなく、流されるのでもなく、ここから先は、自分で考えて、自分で選ぶ。

まだ答えは出ていない。けれど、そのプロセスに向き合おうと決めた瞬間が、確かに今ここにあった。

## 第5章 輪郭を描く選択肢

帰り道、春の光が地面にやわらかく反射していた。

西園との対話を反芻しながら、桐山大地はゆっくりと歩いた。

面談の時間は 30 分ほどだったろうか。話したことは多くない。それでも、自分の中に眠っていた思いが、少しずつ言葉になっていく感覚があった。

——自分の人生、自分で選んでこなかった。

そのことに初めて、自覚的になれたのかもしれない。

「次は、これまでの歩みを棚卸ししていきましょう」

西園の言葉が、胸に残っていた。

帰宅後、久しぶりに大学時代のスケッチブックを引っ張り出した。

薄い紙に描かれた静物画。粗削りな筆致。でも、あの頃は“自分にしか描けないもの”を本気で探していた気がする。

あの熱は、今の自分にあるだろうか？

イラストの仕事は、ある程度「発注通り」に描くことが求められる。要望に応える中で、自分の絵柄も次第に変化していった。

もちろん、それが悪いわけではない。むしろ、職業としてのスキルは鍛えられたと思う。

でも、どこかで「描かされている」と感じる瞬間があった。

「もう一度、自分の“描きたい”を見つけたい」

そんな思いが芽生えたのは、面談の翌日。

自室のホワイトボードに、思いつくままに「やってきたこと」「得意なこと」「大事にしている価値観」などを書き出してみた。

- ・ 描くこと
- ・ アイデアを形にすること
- ・ 一人で進める作業が得意



- ・ でも、他人からのフィードバックは必要
- ・ 安定した生活がしたい
- ・ 誰かの期待に応えたい気持ちもある
- ・ だけど、自分の意思で選びたい

書き出すことで、少しずつ見えてくるものがあった。

たとえば、フルタイムの正社員だけが“就職”ではない。  
業務委託やパートタイム、プロジェクト単位の仕事など、多様な働き方がある。  
フリーランスのままでも、安定性を高める方法はあるかもしれない。

あるいは、週に数日だけ会社に所属して、残りは創作に充てる“ハイブリッド型”の働き方も考えられる。

そうした選択肢が浮かぶようになったのは、西園の「決める前に、立ち止まってもいい」という言葉があったからだ。

翌週、再び相談室を訪ねた。  
ホワイトボードに書き出したメモを見せながら、桐山は語った。

「今すぐ結論を出すのは怖いけど……でも、自分の気持ちに正直に向き合ってみたいと思ってきました」

西園は、桐山の話肯定するように静かにうなずいた。

「答えを急がなくていいんです。少しずつ、輪郭を描いていきましょう」

相談を重ねながら、桐山は「安定」と「創作」のバランスを模索する日々を始めていた。

## 第6章 決めるのは、誰か

春がゆっくりと初夏に差し掛かる頃、桐山大地は三度目の面談に臨んでいた。  
西園智久は、いつもと変わらぬ落ち着いた表情で迎えてくれた。

「今日は、どんなことから話してみましょうか？」

その問いに、桐山は少し笑って言った。

「……今日は、自分の話というより、自分の“決め方”の話をしてみたいんです」

これまでの二度の面談で、仕事のこと、将来のこと、自分の歩みを振り返った。ホワイトボードに書いた“やってきたこと”や“感じてきたこと”を整理しながら、選択肢を広げていった。

——だけど、何かがまだ足りない。  
そう思っていた。

「最近、自分がどういうときに“納得感”を持てるのか、考えてみたんです。で、気づいたんですけど……自分が“選ばされた”って感じると、後から迷いが出てきやすいつて」

「自分の意思で選べたときに、気持ちが安定するんですね」

「そうなんです。たとえば、大学や最初の会社、独立も……“流れで決めた”感じが強かった。今回だけは、ちゃんと自分の基準で選びたいんです」

それが難しいのは、現実的な要素も関わってくるからだ。  
彼女との将来、両親の目、収入の不安定さ——すべてを天秤にかけて選ぶのは簡単ではない。  
でも、自分の中に一本、判断軸を通す必要がある。そう思うようになった。

「たとえば、今後もフリーランスで続けるなら、定期収入が得られるような契約を増やすとか、営業の仕方を見直すとか……。 “安定”を工夫でつukれないかって考えるようになりました」

「ご自身の強みや働き方を活かしながら、状況に合わせて柔軟に対応する道を模索されているのですね」

「でもそれでも無理なら、就職も視野に入れる覚悟も……前より持ててきました」

今はまだ、決断の“直前”ではない。けれど、自分なりの整理と準備は進んできた。  
結論を出す前に、「自分が何を大事にしているのか」を言語化する作業が、こんなにも意味のあることだとは、面談を始める前には思いもしなかった。

「面談に来てよかったです。話すことで、自分の輪郭が少し見えてきた気がします」

「桐山さんの言葉の端々から、ご自身と丁寧に向き合ってきたことが伝わってきますよ」

西園の声は変わらず柔らかい。けれど、そこには信頼と期待が確かに込められていた。

相談室を出たあと、桐山はスマートフォンを取り出し、保存してあった企業サイトのブックマークを開いた。

興味のある業種の会社。フルタイムではないが、業務委託でイラストやデザインを扱っている。

「今の働き方を、否定するんじゃない。必要なら、足していけばいい」

“就職するか、しないか”という二者択一ではなく、自分の価値観を基に、選択肢を創り出していくという発想。

それは、初めて自分で描き始めた、新しい人生の構図だった。

帰り道、空は高く澄んでいた。

背筋を伸ばして歩く足取りに、迷いはなかった。

——決めるのは、誰か。

——もちろん、自分だ。

—終わり—

*Stories on the way.*

## 巻末付録：

### 【キャリア理論による解説】

#### 1. ドナルド・E・スーパーのキャリア発達理論

スーパーはキャリアを「人生全体にわたる自己概念の実現プロセス」と捉え、成長・探索・確立・維持・衰退というライフステージを通じた発達の視点を提示しました。

本作の桐山大地は 32 歳という年齢で、「探索期後期から確立期初期」に差し掛かっていると捉えられます。しかし、彼のキャリア形成は「なんとなくの流れ」に委ねられており、主体的な意思決定の機会が乏しかったことから、探索期における自己理解と職業理解の未成熟が、現在のキャリアの揺らぎに影響していると考えられます。

西園との面談では、「自分で選ぶ」という意識の芽生えとともに、これまでのキャリアを振り返り、自己概念の再構成が行われました。これは、スーパーのいうライフキャリア・レインボー(生活役割の統合)において、「働く自分」と「家族を持つ自分」のバランスを見出そうとする過程ともいえます。

#### 2. ジェラットの積極的不確実性の意思決定モデル

ジェラットは、キャリア決定における不確実性や曖昧さを前提に、「論理的思考と直観的判断の両方を活かす意思決定」を提唱しました。

桐山は「フリーランスか就職か」という二項対立に悩んでいましたが、面談を通じて、就職のかたちも多様であること、安定性を補う働き方が存在することに気づいていきます。これは、多元的な可能性を受け入れ、柔軟に考える姿勢＝積極的不確実性の獲得に他なりません。

本作では、白か黒かを決めるのではなく、「選択肢を描き出すプロセス」が意思決定において重要であることが描かれており、ジェラット理論の実践的意義が体现されています。

#### 3. ギンズバーグの漸成的意思決定理論

ギンズバーグは、職業選択を一度きりの決定ではなく、時間をかけて行う漸成的プロセスとし、「空想期→試行期→現実期」という 3 段階を示しました。

桐山のこれまでのキャリアは、外部の影響(先輩の紹介、環境の流れ)による選択が多く、言い換えれば「空想期の延長のような状態」で意思決定がなされていたともいえます。しかし、結婚や将来への責任感を契機に、「現実期」に突入し、自らの意思と現実的な条件のバランスを取りながら決断しようとしています。

面談を通じて、桐山が「今後の選択を段階的に進めていく姿勢」を持ち始めたことは、まさにギンズバーグのいう漸成的な職業選択のプロセスに重なります。

## 【キャリアコンサルタントの視点からの振り返り】

### 1. 面談の全体構成と意図

本ケースでは、相談者である桐山大地さんが「現在のフリーランスとしての働き方を続けるべきか、それとも就職したほうがよいのか」という迷いを抱えて初回面談に臨みました。

その背景には、以下の要素が複合的に絡んでいました：

- ・ 収入の減少(コロナ禍による仕事減)
- ・ 結婚を見据えた将来不安
- ・ 実家暮らしによる心理的プレッシャー
- ・ 就職経験の乏しさと、自己決定への自信のなさ

私はこの面談で、“相談者の語りを遮らず、まず「今の気持ちを可視化すること」”に重点を置きました。キャリアは意思決定の連続で成り立ちますが、桐山さんはこれまで多くの選択を「流れの中でなんとなく」行ってきた印象があり、意思決定に対する自己効力感が低い状態でした。

### 2. 応答の工夫とねらい

- ・ 「結婚を機に、今後は安定した仕事につきたいと思っているのですね」

この応答は、「今後どうしたいか」をキャリア選択の話題として抽象化し、桐山さんの内面にある“将来に向けた価値観”を整理することを意図しました。

この応答によって、桐山さんは「安定」や「責任」という言葉を自ら使って語り出し、周囲の期待と自分の思いのギャップに気づいていきました。

- ・ 傾聴の継続とペース調整

面談中は、必要以上にアドバイスをせず、「何を大切にしたいのか」「どんなときに納得感を持てたか」などの問いを通じて、桐山さん自身の価値観を探っていく姿勢を大事にしました。本人が気づいていない強みや、過去にうまくいっていた場面に焦点をあてることで、自己理解の補助としました。

### 3. 支援方針の展開と効果

本ケースでは、「すぐに答えを出す」ことよりも、「納得できる選択肢を一緒に描き、検討していくプロセス」を重視しました。

そのため、以下の方針で面談を展開しました：

- ・ 初回は不安の整理と語りの受容
- ・ 次回以降に向けて、棚卸しや価値観の明確化を課題として提案
- ・ 働き方の選択肢を“正社員かフリーか”に固定せず、複数パターンを検討

その結果、桐山さんは“選ばされる人生”から、“選ぶ人生”へのシフトに気づき始め、自ら働き方を組み合わせていく柔軟な発想を持ち始めました。

#### 4. 今後の支援可能性

桐山さんは現在、「選ぶ力」を取り戻しつつありますが、実際の行動につなげる段階では、新たな不安が生じる可能性があります。今後も以下の点に留意しながら支援を継続することが望ましいと考えます。

- ・ 就職活動・営業活動への具体的支援（履歴書・ポートフォリオの整備）
- ・ フリーランスとしての安定戦略の再設計（定期案件の確保など）
- ・ パートナーとの価値観の共有を踏まえたライフキャリア設計

## 【面談逐語録(初回面談・抜粋)】

※以下は桐山大地の初回キャリア相談面談の逐語録です。本データは、キャリアコン国家試験論述試験の事例(第25回)に基づいて構成されています。

CC(西園):こんにちは。キャリアコンサルタントの西園と申します。よろしくお願いします。

CL(桐山):よろしくお願いします。

CC:では、今日はどんなことについてお話しされたいですか？

CL:そうですね……フリーでイラストの仕事をしてるんですが、最近、仕事が減ってきて。このままでいいのか不安になってきて……。

CC:フリーランスを続けることに不安を感じ始めているんですね。

CL:はい。以前は前の職場のつながりで仕事が来てたんですが、最近はそのも減ってしまって。生活はできてるんですけど、将来が見えなくて……。

CC:見通しが立たないことで、不安を感じておられるのですね。

CL:はい。それに、実は結婚を考えている相手がいて……。このままの働き方でいいのか、迷っていて。

CC:結婚を機に、今後は安定した仕事につきたいと思っているのですね。

CL:そうです……。自分ひとりなら、多少不安定でもやっていけるかもしれない。でも、家庭を持つとなると、ちゃんとしなくて……。

CC:ご自身だけでなく、パートナーやそのご家族のことも考えて、将来に備えたいというお気持ちなのですね。

CL:そうですね。あと、親にも“そろそろ就職したらどうだ”って言われてて。家で仕事していると、なんか気を遣ってしまって。

CC:ご実家で仕事をされているからこそ、ご両親からの目も気になってしまうのですね。

CL:そうなんです。心配してくれてるのはわかってるんですけど、ちょっと苦しくて……。

CC:ありがとうございます。いろんな状況の中で、桐山さんが一人で考えてこられたことが、今とてもよく伝わってきました。

CL:……はい。でも、そもそも就職活動ってちゃんとしたことがなくて。最初の会社も先輩の紹介だったし、独立も流れでそうっただけで……。

CC:これまで、なんとなくの流れで仕事や働き方を選んでこられた感じがあるんですね。

CL: はい。今になって、“自分で選ばなきゃいけないんだ”って強く思ってた。でも、自信がないというか……。

CC: 今まさに、“自分で選ぶ”というステップに向かおうとしているんですね。

CL: そうかもしれません……。

CC: 今日お話しいただいた内容をもとに、次回以降、これまでのご経験や大切にしてきた価値観などを一緒に整理して、今後の選択肢を探っていければと思っています。

CL: ありがとうございます。そういう時間があるのは、ありがたいです。

CC: こちらこそ、お話を聞かせていただきありがとうございます。次回までの間に、気になる働き方や興味ある業界などあれば、少しだけ調べておいていただけると、選択肢を広げる助けになりますよ。

CL: わかりました。やってみます。

CC: では、今日はここまでにしましょう。お疲れさまでした。

CL: ありがとうございます。



## あとがき

キャリアの選択は、ときに「迷い」と「責任」のあいだで揺れ続けます。

本作の主人公・桐山大地は、絵を描くことを心から愛しながらも、その働き方に対して「このままでいいのか」と不安を抱えるようになりました。

きっかけは、結婚という人生の転機。愛する人との未来を描くには、生活の安定も必要であり、他者の期待や視線とも向き合わなければなりません。

しかし、彼が本当に必要としていたのは、就職か独立かという二者択一の決断ではありませんでした。

彼に必要だったのは、「自分は何を大切にしたいのか」「どのように生きたいのか」を、初めて自分の言葉で問い直すこと。そして、そこから選択肢を見出すことでした。

キャリアコンサルタント・西園智久は、そのプロセスに静かに寄り添います。

答えを急がせることなく、まず語りを受けとめ、少しずつ相談者の輪郭が見えてくるよう支援する姿勢は、まさに“伴走者”としてのキャリア支援の本質を体現しているように感じます。

人生において「正解」はひとつではありません。

不確実性の中であっても、自ら選び取った決断には、納得感と前進の力が宿ります。

桐山のように「今、何を決めるか」よりも、「どう決めていきたいのか」に立ち返ることが、これからのキャリアにおいてますます重要になっていくのではないのでしょうか。

本作が、キャリアに迷うすべての人にとって、静かな道しるべの一つとなれば幸いです。

また、キャリア支援に携わる皆様にとっては、言葉にならない相談者の“揺れ”にどのように寄り添うかを考えるヒントになれば、これに勝る喜びはありません。

——Stories on the way.

物語は、いつも、歩きながら生まれていくのです。

2025 年 6 月 著者

小説『流れにのまれず、流れをつくる』（フリーランスの迷いと再構築）

© 2025 caritabito.com

All rights reserved. 無断転載・複製・引用を禁じます。

この作品は、国家資格キャリアコンサルタント試験（第 25 回・論述試験）を題材にした創作キャリア小説です。国家資格試験の公式資料とは一切関係ありません。

試験事例の理解促進およびキャリア支援に携わる方々への学びの一助として制作されました。